

地域水系基盤研究会フィールドツアーきろく

# 越後平野の複雑な水の流れと 福島潟の風景を支える インフラを考える旅

－日時

2023年2月10日～2月13日

－参加者（敬称略）

関西大学	林 倫子
京都大学	山口 敬太、谷川 陸
熊本大学	星野 裕司
国土舘大学	二井 昭佳
名古屋大学	中村 晋一郎
法政大学	福井 恒明
早稲田大学	佐々木 葉、小澤 広直、長澤 歩、麥 廣之、結城 拓海



## 福島潟を中心に越後平野を巡る 3+1days

福島潟は新潟市に17残る「潟」の一つであり、T.P.-0.7mに位置する。オオヒシクイやオニバスをはじめとする自然の宝庫であり、地元NPOによる「自然学習園」の管理が行われるなど市民活動も盛んである。水面に浮かぶ島に表象される、その豊かな風景は江戸時代から営々と繰り返されてきた、人の営みを維持するためのインフラによって支えられている。

今回の地域水系基盤研究会フィールドツアーでは、阿賀野川右岸地域の治水の要である新井郷川排水機場を皮切りに、福島潟周辺の揚排水機施設を見学して、低平地の複雑かつ大規模な水管理の実感し、現代の都市や地域における自然観の描き方を構想した。さらに、古太田川をさかのぼった先にある集落を訪れ、その貴重な特性を活かしたデザイン提案を議論した。

### Day1 (2/10)

午後：新井郷川排水機場→ビュー福島潟館内

### Day2 (2/11)

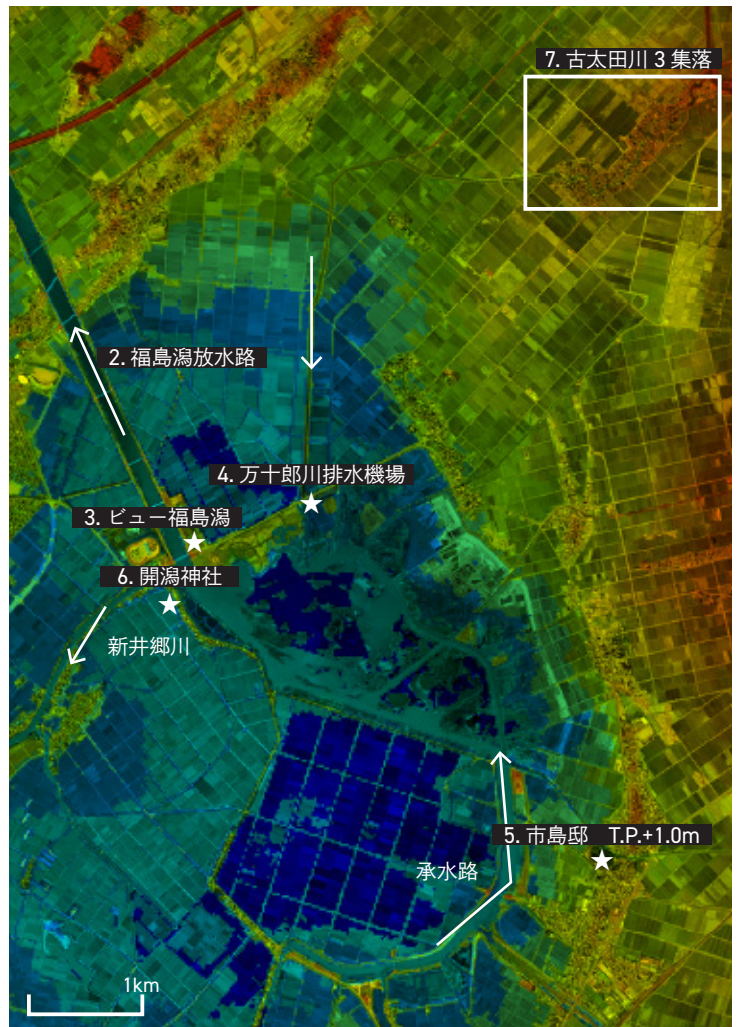
午前：福島潟朝散歩 with 佐藤安男さん→潟端一周→市島邸  
 午後：北区郷土博物館→古太田川集落→議論 with NPO ねつとわーく 福島潟代表 若尾明弘さん

### Day3 (2/12)

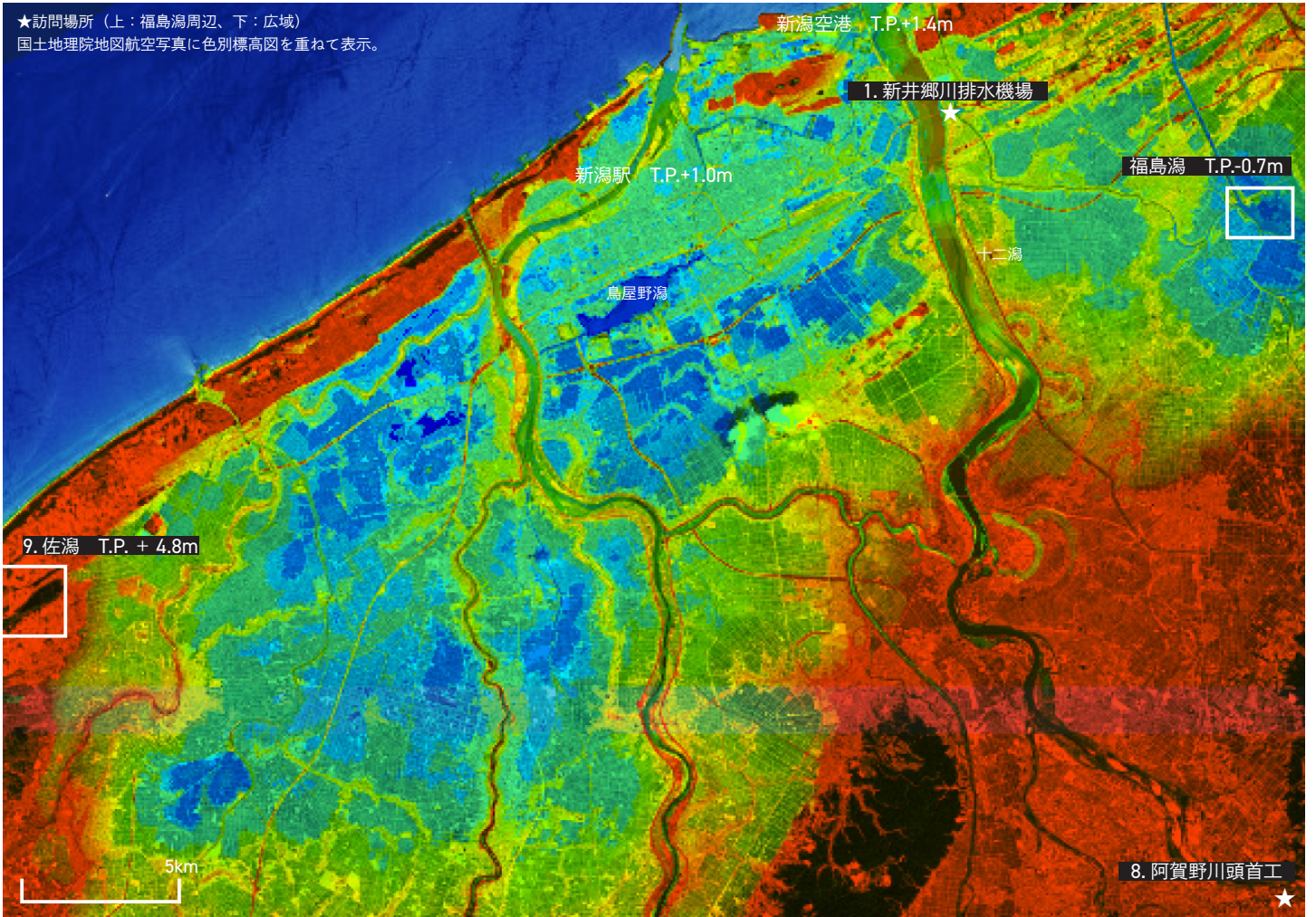
午前：ビュー福島潟→本田集落踏査→阿賀野川頭首工→佐潟  
 午後：新潟空港にてラップアップ

### Day4 (2/13)

午前：下興野公会堂にて住民報告会（早稲田のみ）



★訪問場所（上：福島潟周辺、下：広域）  
 国土地理院地図航空写真に色別標高図を重ねて表示。



## 新井郷川排水機場

所管：新潟県新発田地域振興局農村整備部  
排水量：110m<sup>3</sup>/s  
完成：1961年

新井郷川排水機場は、昭和26年の国営干拓事業に伴って建設を開始した新井郷川河口部に位置する排水機場であり、現在の施設は1995年に運転を開始した2代目である。低平地の中心である福島潟から阿賀野川を通して日本海へ水を強制排水することを目的として建設された。1台あたり排水量22m<sup>3</sup>/sの軸流ポンプ5台が整備されており、その内3台(うち2台は自動運転、1台はポンプの羽の角度を調整することによって水量を調整)は、365日24時間常時排水をしている。大雨時(年10回程度)には、残る2台も稼働し、それでも排水量が足りない場合は、福島潟放水路から日本海へ直接排水を行っている。また、排水機場の新井郷川側と阿賀野川側では、1.5~2mの水位差が生じるため、船を通過させることを目的として船通しが設けられていた。こちらは現在ほとんど利用がなく、年に数回見学舟用に稼働があるのみであるという。

阿賀野川右岸の排水系統としては、施設上流部の胡桃山排水機場、新井郷川排水機場、福島潟放水路が担っており、これらの連携体制は特に構築されておらず、水位を基に各施設の判断に基づいて排水量の管

理がされていることがヒアリングから明らかになった。また、施設の維持費には、固定費として年間約2億~2億5000万円(電気代、人件費、除塵機で集めたゴミ処理代など)がかかっており、また10年に一度の更新でさらに2億5000万円程度の費用が発生している。固定費と更新費で、県や土地改良区の費用負担率は少しずつ異なっており、ポンプの交換に関しては土地改良区の負担割合が固定費の時よりも多くなるそう(土地改良区としては、できるだけ長く使用してほしいという要望になる)。新発田市周辺の都市機能を維持するために、多大なインフラの投資がされていることを再確認した。



★操作車の様子、パネルにはポンプの運転状況が表示されており、ここで常時監視・操作を行う

水の公園福島潟は、現総務省のリーディングプロジェクト「自然とのふれあいの里づくり」(21世紀全国のモデルとなる先導的な事業)によって整備され1997年10月にグランドオープンした。その中の施設であるビュー福島潟の屋上からは、島がいくつも



★全員で屋上に上り、風景を味わう。1日目は生憎の雨で五頭山脈を見る事はかなわなかった

## 1

## 福島潟放水路

## 2

所管：新潟県新潟地域振興局地域整備部  
排水量：300m<sup>3</sup>/s  
完成：2003年



★建設中の福島潟水門(写真中央)と、福島潟放水路(写真右手方向に排水)

福島潟放水路は、福島潟水位が上昇した際に、福島潟から新潟東港経由で日本海に放流するために開削された人工河川である。現在増水時に新井郷川への流入をコントロールして、放水路へ確実に流すための水門が建設中である。放水路は事業費約480億円をかけて2003年に完成。東から西へ流れる新発田川と、放水路が立体交差する「川の十字路」もあり、砂丘間低地を人工的に掘削した様子を感じることができる。

水門の工事が完了した後、その役割やインフラ工事の実態について市民に伝えていくための方法や、気づきのきっかけとなる活動を展開していく上でポテンシャルの高い場所について意見交換があった。

浮かぶ福島潟の景観と周辺の微高地に張り付く集落の様子を一望できる。当日は周辺の「干拓された潟」も一面の雪に覆われており、「目を細めると潟だった頃の風景がわかる」といった参加者からの声も聞かれた。

## 水の駅 ビュー福島潟

## 3

管理：新潟市北区  
ねっとわーく福島潟(指定管理者)  
設計：青木淳  
完成：1997年



佐藤さんといく

## 早朝の福島潟さんぽ

日が上って間もない朝7時より、環境省が設置した野鳥の観察スポットである「雁晴れ舎」に向かって、「NPO ねっとわーく福島潟」の佐藤安男さんにご案内いただき、早朝の公園区域内を探索。野鳥の声に包まれながら、2月の深々と冷え込む福島潟の朝を散策した。



雁晴れ舎に向かう園路には、オオヒシクイやハクチョウのフンがちらほら。フンの色で食べたものがすぐにわかるそう。菱の実を食べた鳥のフンは真っ黒。



道中は少し固めの雪に覆われており、自然学習園に訪れる野鳥・小動物の新鮮な足跡がいくつも。奥はイタチカタヌキ、手前の三本足はコハクチョウのもの。



福島潟の水面にもうっすらと氷が張っていた。右手に見えるのは、指定管理者である「ねっとわーく福島潟」のみなさんが整備した木橋（現在は使用不可）



春を待つ自然学習園の池の様子。黒い囲いは、マコモがザリガニに切られてしまわないようにと市民活動団体のメンバーが作ったもの。



雁晴れ舎からの眺め。分厚い雲間からやわらかな朝の光が差しこむ。まだ寒く、田んぼにも餌が少ないことから早朝に潟から飛び立つ鳥は少なかった。



自然学習園へと続くハンノキの並木みち。定期的に市民活動団体によって剪定がされており、写真の奥のようにきれいに積まれていた。

## 万十郎川排水機場 4

管理：新潟北土地改良区  
工事：2019年～

排水条件が地形的に不利な低平地においては、かんがい排水事業の排水基準（10年確率降雨量）では事業目的の達成が難しいことから、農地防災排水事業と併せて一体的に整備することで、農地防災排水事業の排水基準（50年確率降雨量）で施設の整備計画を立てることができる（新発田地域振興局 農村整備部 HP より）。万十郎川排水機場は、県営かんがい排水事業の一環として、排水機場の新設と排水路の付け替えを行うものであり、現在も排水路の掘削や、鋼矢板護岸の新設を伴う第22次工事が進行中である。

福島潟に日本海側から水が流れ込む様子は、阿賀野川右岸地域における水ネットワークの複雑さを表象している。当日は、車内からの見学・説明となったが、隣に残る旧



★万十郎川排水機場の様子（以前撮影したもの）

排水機場との大きさの対比に改めて驚いた。福島潟の周辺には、当該施設のような大小の揚排水場が北土地改良区管轄のものだけで54基存在する。少しずつ目が慣れてくると、潟周辺にポツポツと排水機場が確認できる。

## 市島邸

## 5

県指定有形文化財(1962年)

指定名称：市島家住宅(表門、本座敷、新座敷、数寄屋、居室郎、門番所、倉庫、茶屋、説教所など)

福島潟干拓に努め県内屈指の豪農となった市島家の住宅。明治初期造営の大邸宅と、水池を中心に配した4000坪の回遊式庭園からなり、1962年には市島邸の十二棟一構が県の文化財に指定されている。

市島家は、丹波の国に発する家系であり、1598年、溝口候の新発田移封に伴い加賀

大聖寺より随従して以来、次第に栄華を極めた。本家は拠点を現新発田市、水原と移し、水原時代には福島潟の干拓を中心に蒲原平野の開発に努め、北越有数の1,000町歩地主となった。早稲田の創設者、大隈重信のパトロン的存在でもある。

戊辰の役に水原の邸宅は兵火により焼失したため、十世七代徳次郎(静月)が、現在の地に新たな市島家本邸を造営している。庭園内の池の水は、上流の地下水を引いており、雪捨て場としても使用されていた他、増水時には一定の貯水能力も備える。園内南側の竹林の先には干拓された潟が広がっており、かつて潟が一面に残されていた頃の風景を想像させる。



★池にせり出す数寄屋「水月庵」(写真上)と、1790年代の福島潟周辺地図(写真下)

## 開潟神社 周辺

## 6

建立：1876年

祭神：山本丈右衛門はじめ村人先祖



★開潟神社の様子。その奥は現在は干拓されているが、かつて潟だった

開潟神社は、1755年に幕府より開発権を与えられ、福島潟干拓に尽力した山本丈右衛門や、1851年に新発田藩から新鼻新田70町歩余を新鼻村人とともに購入し、開発にあたった葛塚の商人斉藤七郎治、村人の先祖などを祀るために新鼻甲の人々によって建立された神社である。現在の社殿は集落の住人によって2003年に建て替えられたものであり、水と闘ってきた開発先駆者らへの気持ちが今も根強いことが窺える。

隣の遊漁広場では、オオヒシクイ(警戒心が強くすぐに逃げてしまった)や大勢のハクチョウを間近で観察することができた。

## 古太田川 3 集落

## 7

古太田川沿いの3集落：下興野・太田新田・飯島新田

2日目最後は古太田川沿いの集落を見学した。3集落の内、上流に位置する下興野集落は江戸時代前期頃には既に人が居住し始めていたようであり、集落内には1615年に建立され、2019年に国の有形文化財に登録された長願寺が位置する。福島潟流域圏内の河道の成立年代と集落の地理的な関係性の分析から、集落が川に沿うように立地しており、また実際の調査からも集落と川の距離が近く、住民によるカワドの設置といった関与が今も見られる。すでに詳細な調査を進めており、デザイン手法提案のケーススタディ地と考えている。

まず初めに訪れたのは、太田川から水を取水する位置にある下興野頭首工である。1962年の太田川改修に併せて整備されたものであり、周囲には開潟神社に祀られている山本丈右衛門の名前が刻まれた橋が残されていた。そこから、取水した水は、市によって整備された親水公園を流れ集落を通る。同公園については、整備前のハンノキの林の状態の方がよい、といった意見も聞かれた。当日も複数の車が駐車されてい

る様子は見受けられたが、公園で寛いでいる人や遊んでいる子供の姿は見かけなかった。

川沿いの集落の見学では、「思い思いの使われ方をしている」「明るい源平川になつたらよい」などの感想が各参加者から出た。(詳細7ページ)



★下興野頭首工(写真上)と、親水公園の様子(写真下)

# 阿賀野川頭首工

8

所管：新潟県新発田地域振興局農村整備部  
 計画洪水量：11,000m<sup>3</sup>/s  
 取水水位：21.5m、取水量：49.79m<sup>3</sup>/s、堰長：206.4m

福島潟周辺を含む阿賀野川左右岸計11,600haを潤す県内最大の取水施設であり、1門32mのローラーゲートが3門と、幅38mの転倒式ゲート2門からなり、左右岸併せて最大取水量は、48m<sup>3</sup>/sを取水。右岸側からの取水は、農業用水だけでなく、県企業局用水道や新潟東港地域水道、阿賀野市上水道としても使用しているため、

連合含め4者で頭首工や水路の維持管理費を負担している。上流部の取水口も確認でき、福島潟周辺の水との繋がりを実感する契機となった。

当日は、阿賀野川頭首工の整備時期と新潟水俣病との関連性についても話題となった。そこで阿賀野川右岸部の取水に関する出来事と新潟水俣病に関する出来事を年代順に整理し、右表のようにまとめた。昭和電工鹿瀬工場では、1959（昭和34）年頃からアセトアルデヒドの生産量を急激に増加させており、それに伴い阿賀野川へ排出されたメチル水銀の量も、操業を停止する1965年までの間年々増加していったと考えられる（「新潟県水俣病のあらまし」より）。

年	取水に関する出来事	水俣病に関する出来事
1734	●新江用水を整備	
1748	●新江用水取水口（1の樋、2の樋）設置	
1927	○南耕用水整備	
1929		昭和肥料鹿瀬工場操業開始
1936	アセトアルデヒド生産	昭和合成化学工業設立
1948	▲赤坂山の出鼻に新しい取入口を完成	
1956		水俣病確認（熊本）
1957		昭和化学が昭和電工に吸収合併
1959	アセトアルデヒドの生産量増大	
1965	鹿瀬工場がアセトアルデヒドの生産終了（1月）	新潟水俣病確認（5月）
1967	阿賀野川頭首工整備	
1973	■工業、水道用水も加わり共同工事として施行	
1978	↓	水俣病安全宣言
1984	■工事完了	



# 佐潟

9

面積：約44ha  
 所在地：新潟市西区赤塚  
 水面標高：T.P.+4.8m

佐潟は1996年に国内10番目のラムサール条約湿地に認定された溜池であり、湧水を水源とする。海拔15~40mの砂丘に囲われた上潟と下潟からなり、今回は上潟側の水鳥・湿地センターを訪問した。越後平野に飛来する水鳥たちは、潟をねぐらとして、田んぼで採餌しており、また気温の変化に応じて潟を使い分けているという（福島潟より佐潟の方が積雪量が少ない）。センター内には、毎週金曜日に実施されるというハクチョウの飛来数が掲示されていたが、訪れた週は651羽と、先週の8657羽に比べて大幅に減少しており、越後平野全体として水鳥のシーズンが終わりを迎えていることを感じさせた。

阿賀野川頭首工から佐潟方面へ向かう車



★福島潟とはまた違った景色。奥には角田山

中からは、日本海側に砂丘列が連なっており、小高い山のように感じることができる。水面標高-0.7mであり周辺を干拓地に覆われている福島潟と、水面標高+4.8mの佐潟を比較することで、潟それぞれに異なる性質を体感した。



★下興野集落上流部での集合写真  
(左)、上流集落と下流集落の間にある  
角の堰(左下)、土羽に設えられた  
コンクリート製階段(左中)、好評  
だった個人宅のニワとその前の区画  
(右下)



**星野先生** 明るい源兵衛川になると良い。/カワドなど個人のものがオーバーレイしている風景は残ると嬉しい。/古太田川がよくなるのは当然として、福島潟全体に貢献する(水質など)、リンク、リードしていくようなメッセージを発せられないか。

**二井先生** カワドのテリトリーはどうなっているか?地籍は?/生き物はいない感じ...昔どう使っていたか調べてみてはどうか。/パブリックに使う場所を生かしたい、例えば神明神社の前あたり。/土のよさは残した方がいい、座る場所が作れないか。仕掛ける場所をセルフビルドしてはどうか。

**山口先生** 生活景が滲み込んでいる感じの川の風景が良い、人の手が入っている感じは維持したい。/どういう経緯で作られてきているのか、調べた方が良さそう。伊庭だと川から先人を知る、繋がっている

感覚がある。/草刈りなどメンテナンスの実態、木が残っている理由は?粗朶を使っているのはなぜ? 30年、40年前の様子を知りたい、写真などないか聞いてみると良い。

**谷川先生** 庭とのつながり、など作り込みすぎない、生活との関わりがわかるようなものを作っていくのが大事ではないか。/住民の方々と過去の話と共有して、意識させるような場があると良い。/橋詰は視点場になりうると思う。

**林先生** 水路の維持管理方法がどうなっているか。ルール、過去からの変容があるか? 雪捨て場にもなったりするか。/地先の管理、鴨川も堤防ができる前は同じだった、利用と修繕はセット。/生き物の住処になっている?人間と生き物がセットの系として考えるのが大事。

**中村先生** コンクリート護岸がない川を徐々にみた、なぜ作らなかったのか、手入れをすることをずっとやってきていると思うが、今後も可能か?/護岸なしでやっていける、というすごい事例。/水質の変化、アクティビティを聞けると良い。

**福井先生** 護岸のことはやはり不思議。/地形的にも珍しい、集落の尾根を川が通っている、土砂が多かったから?

**若尾さん** 新発田の赤谷地区は粗朶の生産地で請願書の議長が社長、自然学習園でも使っている。/新潟ではホタルは川ではなく田んぼに出る。/太田小でも環境教育の一環でホタルのためのビオトープを作ったことがある。

## ラップアップ：今後の研究活動に向けて

**二井先生** 埼玉で湿地の研究をしているので、次の景観・デザイン研究発表会に出したい。

**佐々木先生** 滝澤恭平さん（水辺総研）の博論で取り上げられていたグレーインフラに手を入れていく手法は参考になる。土肥先生のエコデモもどこかでこの科研にリンクできると嬉しい。

**中村先生** 小さな自然再生への順応的ガバナンス（宮内泰介先生）の適応可能性をテーマに今年度善福寺川で卒論を実施。順応的ガバナンスの状態を定量・定性の指標から評価可能なチェックリストを作成している。状態は違うけれどガバナンスのあり方は古太田川と似ている気がする。

**佐々木先生** チェックリストもうまく使っていけると良い、LEED認証制度などもそう。宮内泰介さんのお話を聞いてみたいので研究会にお呼びするのはどうか。

**中村先生** 流域治水は、主体の関わり方、折り合いのつけ方が重要な視点。田んぼダムも同様である。

**山口先生** 大和川水系では、国交省と奈良県の別個の事業を、流域治水の特定河川で統合している。理想系ではあるがなかなか難しい。

**星野先生** 球磨川について島谷幸宏先生にご紹介いただくのはどうか？合わせて星野アテンドで熊本視察も。

**山口先生** 地域水系基盤にも、「潟普請」、のように名付けられる行為、コモンズができると良い。

**佐々木先生** 山下三平先生たちの雨庭はそれにあたる。

**中村先生** 地域水系基盤研究会としては、土地の履歴だけでなく、水の流れの変化もみていった方が良い。計画の変化をみていく必要がある。土地の履歴は地図からみて、水の流れは管理者の持っているものからみることができる。

**星野先生** 人吉も、かつて水の流れがあったところが被害が多かったりする。災害の履歴も重要。

**二井先生** 福島潟の周りの自然堤防がどうやってできたか気になる。

**佐々木先生** 博物館の地図に福島潟砂丘という凡例があった、その辺もちゃんとみる必要がありそう。

**谷川先生** 近江八幡と似ている風景があったが、生業など暮らしには独自の特徴があるように思った。

**佐々木先生** ビュー福島潟や雁晴れ舎みたいに俯瞰できる場所があると少し違う。近江八幡もそういうものがあるか→あるにはあるが有効活用できていない（谷川）。

**佐々木先生** 若尾さんによると福島潟の水位を下げしてほしい（農地の水をはけて作業しやすくしたい）という要望が多いそうだが、生物学的には不都合。大熊孝先生の「都市の自然観」を考えていく必要がある。

**山口先生** 水管理については、土地改良区の合併で合理化していくが、その後の仕組みやロジックがない。過去のシステムがなぜ成立していたのか、変わるにしてもどのようにやっていけば良いのか、評価できると良い。

**林先生** 水管理はリスク・コストと受益で揉める。新しいパラダイムとして考える必要がありそう。

**中村先生** 干拓の歴史については、近江八幡も福島潟も、増産・減反政策・今の電気代上昇など、地域から離れているところの大きな影響が強いように思う。地域水系基盤、というローカルなスケールを考えると、政策・グローバル化などの大きい話をどう考え、位置付けていけば良いか考えることが必須。



★最終日、晴天の福島潟の眺め

## 参考文献 / ご提供いただいた事例

### ●本まとめに使用した資料

1. 新潟市潟環境研究所：越後平野における新たな地域学 みんなの潟学、2018。
2. 新発田地域振興局 農村整備部：【新発田】農業水利施設百選：阿賀野川頭首工から導水する3大幹線用水路、[https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shibata\\_noson/1356774925544.html](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shibata_noson/1356774925544.html)、2019。
3. 新発田地域振興局 農村整備部：【新発田】くらしを守る阿賀野川頭首工、[https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shibata\\_noson/1274220090696.html](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shibata_noson/1274220090696.html)、2019。
4. 新潟市：潟のデジタル博物館、<http://www.niigata-satokata.com/>、最終閲覧 2023.2.18。
5. 新発田地域振興局 農村整備部：新井郷川排水機場、2023年入手。
6. 阿賀野川土地改良区：阿賀野川土地改良区だ

より第21号、2015。

7. 新潟県：新潟水俣病のあらまし（令和元年度改訂）、<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcbjpcglclefindmkaj/https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/212530.pdf>、2020。
8. 新潟県：新潟水俣病関係年表、<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcbjpcglclefindmkaj/https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/87124.pdf>

### ●議論中に取り上げられた先行事例

#### 滋賀県伊庭町

・京都大学川床カフェ

<https://lepl.uee.kyoto-u.ac.jp/2013/08/>

<https://lepl.uee.kyoto-u.ac.jp/2014/08/>

・伊庭桃

<https://www.city.higashiomi.shiga.jp/higashiomism/0000010792.html>

・文化的景観「伊庭内湖と水路の村」調査報告  
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/234601>

#### 北海道茂漁川

[https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen\\_keikaku/kluhh4000000yov.html](https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen_keikaku/kluhh4000000yov.html)



## 古太田川集落での住民報告会

古太田川沿いの集落(p.5,7)において早稲田大学が2022年11月に実施した調査と、今回の研究会メンバーとの議論を踏まえた結果を2023年2月13日に区長さんをはじめ住民、「憩いの川辺親水歴史川遺構の保存に関する(求める)陳情書」取りまとめに関わった新発田市議会議員に対して報告をし、意見交換を行った。2022年11月の調査では、古太田川の沿岸約2kmを調査範囲として、川幅の実測に加えて、護岸や川辺に現在も残っているカワドのデザインサーベイを実施した。また、下興野集落の区長であるワタナベさんと市議会議員の五十嵐さんにご案内いただきながら、かつての使われ方や、陳情に至る経緯に関してヒアリングを実施した。



### 古太田川のステキ7つ

調査の結果を踏まえて、早稲田大学が考える古太田川の特徴及び魅力を「ステキ」として7つにまとめた。

まず何といっても、川沿いには住民お手製のカワドがいくつも見られる(ステキ1)。木製のものから、コンクリート製のもの、手すりを取り付けて水に近づきやすいように工夫がされているものなどデザインや素材には一つとして同じものがなく、その場所ごとに異なる川への接近のしかたのバリエーションを表象している。また、土羽が残ったままの区間があり、護岸が整備されている部分についても、均質ではない作り方がされている点も特徴である(ステキ2)。護岸は、家の前の部分をその持ち主が管理している様子が窺えるが、家の敷地の延長として川を使っていたり、川を庭のように利用している様子も見受けられ、パブリックな空間をプライベートな空間として上手に取り込みながら、住民らが川を楽しんで使いこなす様子が見られる(ステキ3)。こうした、自主的管理の様子は川の堰にも現れていた(ステキ4)。延長2kmの区間には3つの集落が存在するが、角落しの堰が2つもあり、水の元気な音が聞こえてくる。

これら、川を使いこなす、楽しんでいる様子は古太田川が有する環境的側面が寄与する所も大きいだろう。水深が浅く、水質が比較的良好であるため川底が見える(ステキ5)、川が緩やかに蛇行しており、スペクタクルに移り変わる体験を楽しめる(ステキ6)。実際には柳をはじめとする立派な樹木があり、水辺の良い目印となっていたほか、川沿いを歩くと時々住居の間合いから覗く五頭山脈の山々が、集落が立地する広大な越後平野との繋がりを体感させてくれていた。また、川に視線を戻すと、川沿いや橋には手すりがないために容易に川に近づくことが出来る環境が現代にあっても残されていることを確認できる(ステキ7)。地理的な条件と水際への高いアクセス性という稀有な環境、それを管理し使いこなしてきたこの場所の自治の積層が、表れとしての豊かな風景を支えている。



### 古太田川のステキ

- その1 手作りかわどがたくさんある
- その2 護岸が均質じゃない
- その3 川と暮らしが近い
- その4 堰が2箇所もある
- その5 川底が見える
- その6 歩いていると水辺の景色が変化する
- その7 橋や水際に手すりがない

★当日の発表用スライドから：福島瀧に流入する河川のHLCと集落との位置関係から、地域水系基盤のデザインを展開していく上でのポテンシャルが高いと考えられる3集落との比較(上)/ステキ1、古太田川のカワドのスケッチ(下)



### 報告を受けての住民のみなさんの感想と今後に向けて

調査の報告を受けて、区長さんからは「このような外からの視点で、自分たちの住んでいるところを見る事はなかった」との声をいただいた。また、他の参加者からは「ここが珍しいことがわかった。みなさんからすると、この川はそのまま残していけばよいのか、それとも護岸の改修をしていった方がよいのか」と質問があり、「見た目として石を貼ったらよい、という話ではなく機能や関わり方が大事であり、そのために形をどうすればよいかを考えたい。現実的に凍結保存することは困難であるので、外部の力も一部借りながら、丁寧に考えていきたい」との意見交換があった。市議会議員の方からは「絵に書いた餅にならないようにしたい」との声もあった。

今後はまず、古太田川の過去の使われ方を丁寧に調査するため、地域の方が持っている写真や語りを収集したり、今後の古太田川の使い方を話し合う、想像を膨らませる場を設けることで、より詳細な調査、川に対する住民の認識を高めていくような取り組みを展開していきたい。

★公会堂にて住民報告会に参加いただいたみなさんと